

富嶽百景

太宰治

富士の頂角ちようかく、広重の富士は八十五度、文晁ぶんちようの富士も八十四度くらい、けれども、陸軍の実測図によつて東西及南北およびに断面図を作つてみると、東西縦断は頂角、百二十四度となり、南北は百十七度である。広重、文晁に限らず、たいていの絵の富士は、鋭角である。いただきが、細く、高く、華奢けさである。北齋にいたつては、その頂角、ほとんど三十度くらい、エツフェル鉄塔のような富士をさへ描いている。けれども、実際の富士は、鈍角どんかくも鈍角、のろくさと拡がり、東西、百二十四度、南北は百十七度、決して、秀抜しゆはつの、すらと高い山ではない。たとえば私が、印度いんどかどこかの国から、突然、鷲わしにさらわ

れ、すくとんと日本の沼津あたりの海岸に落されて、ふと、この山を見つけても、そんなに驚嘆きやうたんしないだろう。ニッポンのフジヤマを、あらかじめ憧れあこがているからこそ、ワンダフルなのであつて、そうではなくて、そのような俗な宣伝を、一さい知らず、素朴な、純粹の、うつろな心に、果して、どれだけ訴へ得るか、そのことになる、多少、心細い山である。

低い。裾のひろがつている割に、低い。あれくらい裾を持つている山ならば、少くとも、もう一・五倍、高くなければいけない。

十国峠じゅうこくとうげから見た富士だけは、高かった。あれは、よかつた。はじめ、雲のために、いただきが見えず、

私は、その裾の勾配「しつぽう」から判断して、たぶん、あそこあたりが、いただきであろうと、雲の一点にしるしをつけて、そのうちに、雲が切れて、見ると、ちがつた。私が、あらかじめ印しるしをつけて置いたところより、その倍も高いところに、青い頂きが、すつと見えた。

おどろいた、というよりも私は、へんにくすぐつたく、げらげら笑った。やつていやがる、と思つた。

人は、完全のたのもしさに接すると、まず、だらしなくげらげら笑うものらしい。全身のネチが、他愛なくゆるんで、之これはおかしな言いかたであるが、帯おび紐ひもといひもて笑うといつたような感じである。諸君しよくんが、

もし恋人と逢つて、逢つたとたんに、恋人がげらげ

けいしゆく
ら笑い出したら、慶祝である。必ず、恋人の非礼
をとがめてはならぬ。恋人は、君に逢つて、君の完
全のたのもしさを、全身に浴びているのだ。

東京の、アパートの窓から見る富士は、くるしい。
冬には、はつきり、よく見える。小さい、真白い三
角が、地平線にちょこんと出ている、それが富士だ。
なんのことはない、クリスマスの飾り菓子である。
しかも左のほうに、肩が傾いて心細く、船尾のほう
からだんだん沈没しかけてゆく軍艦の姿に似てい
る。三年まえの冬、私は或る人から、意外の事実を
打ち明けられ、途方に暮れた。その夜、アパートの
一室で、ひとりで、がぶがぶ酒のんだ。一睡もせず、
酒のんだ。あかつき、小用に立つて、アパートの便

所の金網張られた四角い窓から、富士が見えた。小さく、真白で、左のほうにちよつと傾いて、あの富士を忘れない。窓の下のアスファルト路を、さかなやの自転車が疾駆し、おう、けさは、やけに富士がはつきり見えるじゃねえか、めつぽう寒いや、など
眩つぶやきのこして、私は、暗い便所の中に立ちつくし、窓の金網撫でながら、じめじめ泣いて、あんな思いは、二度と繰りかえしたくない。

※テキストは、インターネット上の図書館

「青空文庫」をもとにして加工しました。